
想像と現実は別物

gujin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想像と現実とは別物

【Nコード】

N2285L

【作者名】

g u j i n

【あらすじ】

就活が未だに終わらず将来が見えない俺、御堂悠は目が覚めると広大な林の中にいた。おまけに自分の体はとても好みな体に変化。夢かと思って二度寝を決心するものの目が覚めても林の中。現実逃避をしながら前に進むとするが現実逃避したくなる出会いがいくつもいくつも……。俺、就活がうまくいかなくて未来に希望が持てなかったけど今はいえる。本気で自分の未来に希望が持てないよ」

現実逃避の先での出会い（前書き）

どうみても陳腐な文章です。暇つぶし程度に見てくれたら幸いです。

現実逃避の先での出会い

拝啓 我が父、母。

いかがお過ごしですか。

ワタクシは現在見たこともない広大な林の中で絶賛サバイバル生活中でござーます。

見た目・・・というか性別さえも変わってしまったてあなたの息子は娘になってしまったようです。

就活が苦しくて現実逃避ばかりしてた覚えはありますがここまで逃避してしまったのは自分でも驚きです。

ここはあるけどあるけど先の見えぬ林で唯一の救いは水気のある果物がある木があることでしょうか。

就活の最中では自分の将来が見えずに絶望的でしたが今では自分の命が絶望的です。

ほら、今も目の前から猫を追ってきた狼の群れが・・・、

・・・狼の群れ？

「つてこつちくんじゃね〜っ!？」

「そっ、そういわずにたすけて〜っ!！」

久しぶりに聞く人語に気づく余裕もなく群れの反対方向へ逃げ出す俺。

それを追いかける黒猫にそれまた追いかける狼たちの群れ。

走る先には木が乱立しており非常に走りにくい。

しかも盛大に変わってしまった体のせいで全力疾走も出来ない。

すぐに黒猫と狼たちに追いつかれてしまった。

「逃げるなんて酷いでしょ！」

「普通逃げるわ!！」

足下で毛を逆立てながら狼に相對する黒猫がいつが俺にそこまで余裕がない。

というか現代っ子の俺が狼と相對するなんてどんな確率だ。

普通に新聞に載るぞ。

「それより貴方トリッパーでしょ！

なんか一気に倒せるのなの？！」

「はっ？トリッパー？

お前中二病か？

というかそんなこと喋ってないで今この状況をどうにかすることを考えるよ、元凶」

こちらを囲んでじりじりと距離を詰めてくる狼をにらみながらどうやって戦おうか考えているところで猫が叫び口調で話してきた。

「冗談いってないわよ。

その服から見て貴方絶対トリッパーでしょ。

もしかして自覚してないの？」

なにやら猫がさっきから叫んでるがこちらは目の前の狼の対処で精一杯なんだよ。

まさかこんな訳の分らないところで俺が終わるのか。

「そうなのね、なら集中して！

落ち着いて心の中に浮かぶものをはき出す感じだっ!?!?」

「お前は何を言ってるんだ!?!?」

「イイから早くっ!?!?」

訳も分からずとりあえず必死に心を落ち着かせてナニかに集中させる。

心に浮かぶもの。

心に浮かぶもの。

心に浮かぶもの。

なんか出てきたっ!?!?

訳も分からず集中していると確かにナニかが心に浮かんできた。

それはいうならばPCのウィンドウ?

「なんか心の中で変なイメージは出てきたぞ!」

「ならそれを相手にぶつける感じではき出してっ!?!?」

「はき出すつてどじやつてー!？」

「そんなもの適当よっ!？」

はやくっ!?!」

そんなこと言われても俺は某ミスターじゃないからそんな抽象的な感じでは分らん!？

そもそもウィンドウをどうやってぶつけるんだ?!

そんな感じで混乱しているときに先頭にいる狼が突っ込んできた。

っ!？

俺はとっさにイメージの中でそのウィンドウを“クリック”した。

“生成”

『フロストガード』

イメージしていたウィンドウに文字が現れると同時に狼たちと俺たちの間に氷の壁が出現し分断した。

出現したのは俺の身長約3倍はあるのではないかと思われる氷の壁。

よほど冷たいのか白い冷気が立ち上り、そこに氷が存在していることを教えてくれる。

氷の壁の向こうで狼のキヤインという鳴き声が聞こえたから突進してきた狼はきつとこの氷の壁にぶつかったんだろつ。

非常識なこの現象に呆然としていると足下の猫が興奮したようにこちらに話しかけてきた。

「貴方すごいじゃない!？」

なに?氷結系の能力者だったの!?

最初っから出してくれたら良かったじゃない。

もしかしてエターナルフォースブリザード?!

なにがあれ、これであいつらを倒せるわ!」

「お前が何を言ってるのかあんまり理解できないし、できれば理解したくない気もするけどそれは置いてこう。」

とりあえず同じようなことをすればいいのか?」

「そつよ!さつさとあいつらを凍らしてちょうだい!」

とりあえず目をつぶって先ほどのイメージを思い出す。
するとまた先ほどと同じウィンドウが出てきた。

ガキンッ！

「はやく、あいつらこの氷を割ってくるつもりよ！」
音が鳴った方を見てみると蜘蛛の巣のようなひびが入っている。
おそらく1点突破するつもりなんだろう。

「とりあえず行くぞ？」

イメージで生成と書かれたアイコンをクリックする。

“生成”

『ミカエルブレイザー』

ウィンドウに表示されると同時に目の前に光り輝く魔方陣が現れた。

「なっ、ななななっ!？」

猫が何かびっくりしているが気を遣う余裕はない。

狼たちがいるであろう方を見るとさっきまでは見えなかった狼たちの影が見える。

どうやらもう少しで割ってきそつだ。

これがどういったものでどういう効果を現すかは分からないが、これ以外に頼れるものはない！

何となく思い浮かんだイメージで両手をかざす。

かざすと同時に狼が壁を割ってこっちに突っ込んできた。

「いつけええええー！ー！ー！ー！！！」

俺の気合いと同時に魔方陣から極太のビームが発射された。

轟音と共に周りに出来ていた氷の壁は砕け散り、俺に突っ込んできた狼は後続の狼もろとも蒸発した。

極太のビームは勢い衰えず地表に大きな傷跡を残し、角度がやや上を向いていたのかそらへと昇り、大きな雲に大穴を開けて消えていった。

極太ビームが切れ、魔方陣が消えた後俺は酷い脱力感と共に地面へとへたり込んだ。

とりあえず難局は去ったと思いつと思いつ。

あれ、さっきの猫は？

現実逃避の先での出会い（後書き）

忙しくて、でも遊びたい。どんなに陳腐でもかいたらすすきり。き
っとそついうことだと思っんだ。

状況把握、やはりおっさんか

まさかあんな非常識すぎるものがでるとは思わなかった。

正面の木は先ほど発生したビームの影響で見ても無惨な姿へとなっていた。

山火事になっていないのがせめてものの救いだろう。

感慨に浸っていると先ほどの元凶たる猫が興奮気味に話しかけてきた。

「貴方すごいじゃない!？」

なになに、氷結系じゃなかったの?!

羽も生えてたし頭には輪っかもみえたし!?

もしかして天使系!?

あーっ、私もそんな能力が良かったー」

「おちつけ、色々言われてもよくわからない。

というかさっきまで気づかなかったけどなんで猫がしゃべってんだよ。

というか二本足で立つな。

ちよびつとだったらかわいいけど普通に二足歩行されたら普通にキモイ」

「キモイとか言うな！

そっか、もしかして貴方はこっちに来たばっかなの？」

へたり込んだ俺の膝に器用に飛び乗ってこちらを見ながら座り込んだ猫が言った。

どうでもいいがこの猫やけになれなれしすぎないか？

「とりあえずこのあり得ない状況になってから二日はたったな」

「そしたら私はちょっと先輩だね。

私はもう1ヶ月はここで生活してるからね。

さて、どこから説明しようか。

そうだ、自己紹介してなかったよね。

私の名前は相田美津。

こんななりだけどれつきとした元人間だよ」

人間！？

この猫が？

当の本人は足で顔をかいている。

・・・ほんとに元人間なのか？

「お前本当に元人間だったのか。

ふつうに喋る猫っていわれた方がよっぽど納得できるんだが」

「むう、ホントだよ。

夢のなかでスクール水着をきたキモイおっさんが出てきて「お前はこんなものが好きなのか。よし、我様がかなえてやるからお前も我様の願いをきくがよい」とかいつて目が覚めたらこんな猫の姿になつてこの林の中に1ヶ月だよ。

ホントに散々だったよ。

人はいないし、体は猫だから全然動けないし、食べ物も魚がやけにおいしく感じるし」

「その割にはずいぶんと猫ライフを満喫してないか」

内容としては非常に辛いものであったろうに普通に目の前でのみ取りしてるこの猫は実はこの状況を楽しんでるのではないかと言っくくらいのびのびとしている。

それにしても、

「なるほど、おそらくだが俺とお前は同じ被害者なんだろうな。

そのおっさんにも恐らく会ってるわ」

「やっぱり?」

「俺の時は女体盛りならぬ男体盛りだった。

はつきりいて目の毒だった、・・・オエ」

「・・・やめて、ただでさえスクール水着でも結構なダメージだったのにそんなもの出されたら脳内汚染が・・・」

「ちなみに刺身と生クリームの混合だった・・・」

「ヤメテーーーーッ、聞きたくないっ！聞きたくないっ！」

耳を押さえて転がる猫もラブリーだがその前に思い出してしまった汚物で俺の方もグロッキーだ。

「……っはあ、とりあえず話を戻そう。」

たしかあのおっさんは欲しいものをやると言っていたな。

俺の場合は俺が言ったわけではないが俺好きな女の子。

なぜか女の子ではなくて女の子の体をくれたけどな」

「貴方もその筋なの。」

私はお前の欲しいものをやるうっていったから猫耳美少女の絵を描いて渡したんだけどどう間違えたのかこんな猫にされてたのよ。

貴方はましね、見た目しか変わってないんだもの」

この猫は俺がうらやましいようだが、性別が変わらないことはとてもいいことなのだぞ。

主に尊厳的に。

「……一言言っておくと俺は元男だ」

「えっ、どっぴいっこと」

「俺の方も自己紹介しておこうか。」

御堂悠。

れっきとした元男だ」

確かにこの容姿はめちゃくちゃ好みではあるがその容姿ではなくその容姿の女の子が俺は欲しかったんだ。

「……………欲しいものに女の子っていったの？

サイテー」

「彼女が欲しいと思うのは健全な男として当然と言っておこう。

ちなみにいってない。

それより女のくせに欲しいのが猫耳美少女とか言っちゃっお前の方がどうかと思っぞぞ」

「ヤメテー、そんな目で私を見ないでーっ！」

白い目で転げる猫を見ながらため息をついた。

数分後落ち着いたのか猫、自己紹介したんだから言い直そう。美津がしゃべり始めた。

「それで説明だったわよね、改めて何から話そうかしら」

「順に行こう。」

まずトリッパーってなんだ？」

そうきいたら美津は首をかしげた。

これが普通の猫だったらかわいいのに。

「あのおっさんから聞いてないの？」

「聞いてないな。」

「等価交換だ」ってこの姿に変えられて逆上して殴りかかろうとしたら目の前が暗くなって気がつけば周りは林。

それから歩き回って二日間だ」

「そうなの、私の時はある程度説明してくれたんだけど。」

多分殴りかかったからさっさと飛ばされたのかしら。

説明すると、トリッパーとはあのおっさん如く介入者らしいわ」

「介入者？」

「貴方小説とかアニメに漫画見る？」

できれば二次ものとかも」

「結構好きだと言っておこう」

「オタクとかそういうのは言わないで置くわね。」

どうせ私も同類になるのだし。」

それならそのなかで良く出てくるトリッパの単語はわかるかしら」

「だいたいわかるな、なるほど。」

そういうこと。」

とつかあのおっさんもオタクなのか？」

「真相はわからないけど、過去にも飛ばした人がいてその人がそういう風に言ってたからそのまま使ってるとか言ってたわ」

「ってことは他にもトリッパーが最低1人はいるということだな。」

しかもオタク系統のが」

「そうなるわね。」

ついでに聞かれると思うから能力の方についても話しとくわね」

「そういえばさっきも俺が普通に何かを出せるのが分かっていたか

のように話してきたな」

「この世界は私達現代人には結構ハードらしくてトリッパーにそれぞれ能力が付加したみたいなの」

やっぱりここは異世界だったか。

「やはりおかしいとは思っていたんだが。」

やはり異世界だったのか」

「らしいわね。」

未だ人と会ったことないし、見たことない生物とか結構いるし。

あのおっさん如くここは私達のいた世界とはちがう発展を遂げた異世界らしいわ。

一回話を戻して、この世界で生き抜くために能力をトリッパーに付与したらしいの。

貴方もさっき使えたでしょ。

とてもすごいやつ」

「ああ、だせたね。」

それはさておきお前も何か能力持ちなんだろ。

さっきの狼も自分で対処したらよかったんじゃないか」

「それができたら苦労しないわ。」

私の能力は『無機物操作』。

その名の通り無機物を自在に操れるらしいわ」

「らしい？」

「だって目が覚めていままですっと石もない林にずっといたのよ。」

実は別の能力があるんじゃないかかと思って試してみたけど全然発現しないし・・・」

完璧にだめだったのか美津はうなだれている。

「砂とかは無理だったのか？」

「バクテリアとか混ぜてるかもしれないが小石とか混ぜてるし一応無機物だぞ」

「RPGでいうなら技術レベルが足りないっていうのかしら。」

将来的に操れるような気はするけど今じゃ無理ね。

「せいぜい砂かけ程度しかできないわ」

「それをすれば良かったじゃん」

「した結果があれよ」

「ですよね」

そういつたらさらに美津はうなだれた。

ド
ム
ム
ム。

そのうちこころとあはれ。

手札すべてジョーカー 実はいえねえ・・・

「それで貴方の能力は結局なんなの？」

氷の壁を出すから氷関係の能力かと思っただらその次はどこぞの魔砲少女ばりのビームだし、翼に輪つかまでるし」

「翼に輪つか？」

そんなものでてたのか？

「気づかなかったの？」

魔方陣がでたと同時に貴方の背中から光る羽と頭には輪つかか浮かんでたわ」

そつえばあのとときでた技っぽい名前は確か『ミカエルブレイザー』だったっけ。

「なるほどね。」

ちなみに俺はまだ完璧に把握してないんだけど。

そつだな、とりあえずあのとき頭に浮かんだものを話そう」

「そうね、貴方は能力の説明を受けてないものね。」

私は一応受けたからだいたいの把握は出来てるけど、あんな全然違う系統のことが出来たらそりゃ戸惑うわよね」

「俺は今の現状に一番戸惑ってる」

「それは言わないお約束よ」

そりゃそつだ。

「とりあえず、俺があのととき思い浮かんだのは・・・なんというか」

「なんなのよ、そんないにくいものなの？」

まあ、確かに言いにくいというか表現しにくいというか。

「そのまま言葉で表すならPCのウィンドウだ」

「はあ？」

そつだよな。

普通そう思うよね。

俺もそう思った。

「それで空欄の行と“生成”っていうアイコンがあるんだがそれを押すと空欄だった
行に技？っぽい文字がでて、その後にあの現象がでた」

「まって、出来ることはまさにファンタジーなのにそのいかにもファンタジーから外れてSFからも外れた珍回答は」

俺に分かったら苦労はしない。

「ちなみに最初の氷の壁の時は『フロストガード』、2回目のビームが『ミカエルブレイザー』」

そういったら美津はさらに頭を抱えてしまった。

「何、その中二みみたいな技名は」

俺もそう思う。

「まあ、恐らくだけど心当たりがあるわ」

「あるのかっ!？」

このちんぷんかんぷんな能力に心当たりがあるってドンだけ!？」

「ちょっと前に　メーカーってはやってたの知ってる？」

「ああ、脳内メーカーとかそういうやつだろ」

二つ名メーカー的なものを作ってダチと笑った記憶がある。

「ええ、それね。」

それで亜種的なもので必殺技メーカーってのがあったのよ」

はあ？

「まさかそれだと？」

「絶対ではないけど。」

これから実験して見ないと分からないけど可能性はあると思うわ。

必殺かどうかは分からないけどね」

そりゃあそつだ。

『フロストガード』なんてどうきいても防御技だし。

「まあ、その理論で行くと同じ技が出る確率はかなり低い？

「多分ね。

技はあの極太ビームを見れば分かるけどかなり強力だけど選択肢がないならかなり使いづらい能力と言わざるを得ないわね」

なんかにやにやしながら言われるとかなりむかつくんだが。

「だって、私と比べて優遇されっぱなしなのにこれで能力がチート過ぎたら理不尽すぎるわ」

そりゃそつだが顔に出すなよ。

「まあ、色々試さないとだめね。

最初の壁と後のビームだけでも体力の消費が桁違いじゃない。

対人に使ってたら過剰戦力過ぎるし、連戦も無理だしね」

「出来たら移動系や回復系もあるといいんだけどな」

「ただの必殺技メーカーでないことを祈るのね」

「すでに只のではないかな」

「さて能力についてはいいわね。」

他にあるかしら

「そうだな・・・」

「とりあえずはこれぐらいか」

「そうね、知っていることは全部話したと思うわ」

割と長い時間話していた気がする。

おかげでのどが渴いた。

「それでこれからどうしようか」

「それはこれからは運動共同体と考えていいのよね」

「もちろん、同じ境遇のヤツがいるだけでも負担がだいぶ違うしな」

そついいながら地面に手をついて立つ。

普段着とはいえ男の時のと替わらない服でだぶだぶになった分を折っているのだがやっぱり動きづらい。

「まずは街探しかな。」

いいかげんにお風呂に入りたいし、一般人の食事もしたい」

「同感ね。」

情報探しも言葉の通じる人がいなきゃ出来ないしね」

そついいながら美津は俺の体を駆け上って頭に乗った。

「なぜ俺の頭に乗る」

「やっぱり猫になってしまった身としては人の頭でゆっくりしてみたいのよ。」

頭に猫が乗ってる美少女って萌えじゃない？」

この女、俺より遙かにディープなオタクらしい。

「それが許されるのは2次元までだ。

リアルでやったら只普通に乗りにくくてすぐに落ちるだろう」

「ふっ、キヤットオブザキヤットの私にかかれば余裕よ！」

頭の上で何か偉そうな美津にあきれながら俺は歩き出した。

まあ、本人も久しぶりに人にあつたから興奮しているのだろう。

今日くらいは大目に見ようと思う

。

「それにしても悠は口調を直したら？」

せっかくの美少女が台無しよ」

「やだよ。

俺はお前と違って諦めていないんだ。

男口調は俺の最後の砦だ」

「私だって諦めてないわよ」

キヤットオブザキヤットと言ったのはどこのどいつだ。と行ってや

りたい。

「で、どこへ向かってんだ？」

「えっ、悠、分かってて歩いてたんじゃないの？」

「いや、適当に歩いてたけど何も言わないから」

「えーっ、っ！？とっ、わわっ！？」

頭の上で落ちそうになっている美津を支えてやる。

「まあ、1ヶ月歩き続けた私が何も見つけれなかったんだからどつちへ行っても同じよね」

「この林の最深部に向かってないことを祈ろうか」

前途多難な俺達だった。

街だ、人だ、俺は（心は）男だ！

「やつ、やつと、街が見えてきた」

「ほとんど、もう足が棒になって動かないわ」

「俺は首が痛くて堪らないよ」

「それは大変ね」

「ホント、どこかの誰かさんがずっと歩かず頭に乗っていたからな」

「それは大変ね」

「・・・」

ピッチャー大きく振りかぶってえええっつ！！」

「ストップストップ！

悪かったからっ！悪かったからメーカー起動させながら森の方に投げようとしなくてえええっ！！」

調子のいい美津に制裁を与えながら俺たちは長い林を抜けついに人のいそうな街に着いた。

ここまでくるのに色々なことがあった。

仮名称「必殺技メーカー」略してメーカーの実験により再び分断される俺たち。

数日後、後ろに巨大なイノシシのようなモンスターをお供に必死にこちらにすがり寄ってくる美津。

いつか見た光景にため息をつきながら派手にきまる必殺技。

数多の自然とモンスターと俺の精神を犠牲にした長い旅路だった。

メーカーも実験によりある程度系統を絞れるようになったが威力の調整は全然出来ない。

せいぜい防御か攻撃かを7割方制御できるようになった気分くらいだ。

せめてメーカーで水を作り出せないかと思つたが結局出てきたのは津波で大きく流されて九死に一生スペシャルしたのはいい思い出だ。

そんな波瀾万丈な過去を振り返りながら俺たちは目の前にそびえ立つ街の城壁と門を見つめた。

門には昔の行商人？のようなドラクエ風馬車がいくつも並んでおり、

門番に申請し、積み荷のチェックを受けているように見える。

未だに頭の上に乗ったままの美津が話しかけてきた。

「それにしても異世界だけあって作りが中世風だね」

「ああ、どうせなら現代風が良かったんだけどね」

「ところで入場料とかとられるのかな」

「可能性はあるけど、それ以前に一つ問題がある」

「ん？なに？」

頭の上で美津が頭をかしげているのか首に振動が伝わる。

どうでもいいが本当にバランス良くなったなお前。

「言葉が通じるかだよ。」

異世界である以上言語が違って当たり前。

あのキチガイからのサービスがあるといいけどね」

「うーん、それがあったかあ。」

「一応ここに送って生活させる以上言語の融通くらい聞かせてくれて

ると思うんだけどなあ。

流石にあのキチガイもそれくらい考えてくれてると思いたい」

俺たちの中であのおっさんはキチガイへとランクアップを果たしていた。

とりあえずこの前起こしてしまった津波の水で衣服と体は一応申し分程度に洗って置いたから乞食に見られることはないと思うが。

「猫である私はともかく、悠は元の世界の普段着だもんね」

「とりあえず異郷の旅服で通すしかないかな」

2人で話しながら行列に並ぶことにする。

並んでみると列は二つあるようだった。

一つは行商人達であろう馬車の列。

もう一つは旅人であろう徒歩の列。

幸い徒歩の列はそこまで多くなかったのですぐに門番と話すことになった。

ちよび髭のダンディな兵士の門番が俺たちに近づいてきた。

おお、本物の剣かな？

一応喋るなよ。猫が喋るかどうかはまだ未知数なんだからな。

「よう、嬢ちゃん、変わった服だな。

一人旅かい？」

「まあそんなところですよ。

まあ一人旅じゃなくて相方もいるけどね

この服も故郷の服で旅していると珍しいと良く言われますね。」

そういうと一緒に美津がにゅと鳴いた。

それにしても鳴き声だけは普通に猫なんだな。

「ほぅ、なかなか賢そうな猫じゃないか。

それにこんなちっちゃい女の子一人で良く一人旅ができたな」

まあ、そこは突っ込まれるよね。

「こつ見えても腕っ節は強いんですよ？」

具体的に襲いかかってきたサイみたいなヤツをメーカーで両断し、周りの木々を派手に伐採するくらいには。

あまりに広範囲すぎたよ『スマツシャーノクターン』。

おかげで俺の半径10メートルがきれいに広場っぽくなってしまった。

美津も俺の頭の上になかったらあのと看断されたサイト同じ道を歩んでいただろう。

どうもメーカーを使うと過剰威力になってしまって困る。

まさに手札すべてジョーカー！。

とりあえず普通の威力の手札が欲しい。

「はっはっはっはっは。」

そうかそうか。

もしかしたら嬢ちゃんは冒険者の類かい？」

んっ？気になる単語が出てきた。

「冒険者ってなんですか？」

私ってそういうこと気にせずぶらぶらと旅してたのでそういうことには疎くて……」

「なんだ、嬢ちゃん。

冒険者も知らずに旅してたのかい？

どこの田舎もんだよ」

「勉強は好きじゃないです」

そういうってほおをふくらます。

きっと勉強嫌いな子だと思ってくれるだろう。

なにか頭の上で悶えている気がするが無視する。

「はっはっはっは、俺も勉強は好きじゃないが最低限くらいは覚えといた方がいいぞ。」

経験者は語るってヤツだ」

うん、見事に乗ってくれた。

「それで冒険者って？」

「おう、そうだったな。

冒険者ってのは町や村のギルドに属するいわゆる何でも屋だな。

ギルドを通しての依頼を受けて探索から魔獣の退治、薬草の採取から街の住民の手伝いまでなんでもやる。

といっても大半の冒険者は名誉とロマンを求めて外へ繰り出してるけどな。

だからここで旅人に会うのは結構まれなんだよ。

ほとんどここを拠点にしている冒険者が帰ってくるのを街に入れるくらいだからな」

なるほど。

ぶっちゃけRPGみたいなものか。

「まあ、この冒険者って中からさらに職やランクとかあるがここら辺を喋ってる後ろの奴らが通れなくなっちまうから後は自分で調べな」

そういわれて後ろを見てみると長い列が出来ていないとはいえ既に10人くらいの列が出来ていてこっちを不満げそうな顔で見ている。

「あつ、すつ、すみませんでした」

そういつて俺は門番と後ろの列の人に向かって頭を下げる。

「にゃっ!?!にゃっ」

その拍子に美津も落ちそうになるがぎりぎりでキャッチする。

「はっはっはっは、いってことよ。」

むさい男の相手ばっかで嫌気がさしてた所だからな。

ほら、いっていざ」

「ありがとうございます」

そういつて俺たちは門をくぐり抜け街へと入った。

「ふう、なんとかタダで街に入れたな。」

言葉も通じたし」

「くくくくくっ」

「どっしたんだよ」

腕の中で美津が笑っている。

「だって、悠がっ、女の子っばく喋ってるんだもん」

そんなおもしろかったか。

ちよつと丁寧に喋っただけなのに。

「あのなあ、男っばいしゃべりより普通のしゃべり方した女の子の方が警戒されないだろ。」

ただでさえおかしな格好した不審者なんだから」

「それだったら普段からそれにすればいいのに」

まあ、確かにそうではあるけどね。

それでも、

「これは俺の今の容姿に対する最後の砦だからな。

だからぶっちゃけ男の時より男っばく喋るように意識してるの」

ケースバイケースだとはいえ普段まで女の子しゃべりにしてしまつたら俺は色々と終わってしまう気がする。

「ぶぶぶぶつ、まあいいんじゃない。

私は大好きだよ。

オレっ娘は、萌えだつ、ボフっ!?!なにすんの?!」

「はいはい、お前は少し黙ろうか」

そういうのは体験するんじゃないかって見て奏でるから萌なんだ。

つまり今の俺にしては苦痛でしかないの。

さて、まずは……。

ぐう〜っ。

「」ご飯だね「」

お金って実は結構技術かかってるよね

さて、ご飯を食べたくともお金がない。

現代であればとある大きな公園に行けばホームレスに対する配給をやったりするかもしれないがどう見ても中世なここでは期待できないだろう。

「とりあえず換金かな」

「えっ？換金するものなんてあったの？」

美津が頭の上で聞いてくる。

まあ確かに美津は猫になったせいで服さえもないしね。

そういえば、後で服を買って今の服を売れば珍しいとか縫い方や布の材質の違いで高めに売れるかもしれない。

と、他に売れるものを考えながらポケットにはいつていた財布を取り出す。

「ああ、そういえばそれがあつたけど絶対使えないでしょ」

たしかに日本円は絶対使えないだろうけど、

「お金としてじゃなくてそういった珍品としてならいくらがお金になるだろ？」

多分」

冒険者家業なんてあるのだ。

珍品を引き取ってくれる店などいくらでもあるだろうというのが俺の推測だ。

「あつ、なるほど」。

その手があつたか」

「お札の方も乾いてきたし、この市場を見る限り文化レベルは恐らく本当に中世並」。

ならお札や硬貨に施された加工はきつと珍しいはず。

だよな？」

「それでお昼ご飯を食べると言うことだね」。

それにしてもせっかくの1万円も千円とほぼ同価値になるんだね。
苦学生だった身としては複雑だわ」

「俺の金である以上俺が一番複雑だよ。」

ああ、諭吉さんが・・・」

そついいながら俺は市場をのぞき、時折値段を聞いて冷やかしながら歩く。

「とりあえず早く換金しに行かないの?」

美津が聞いてくるが俺がこうやって冷やかしているのにもわけがある。

「こつちのお金の単位もものの価値もわからないんだから少しは予備知識として情報を入れとかないとだめだろ」

「あつ、そうか。」

ホントに良く気づくよね」

「これからの自分の命がかかってるんだから石橋を叩きすぎてももんだいはないと思うよ」

市場の値札の文字は読めないが聞いた値段と周りの人の取引を見ていてほしいの価値が分かってきた。

単位はそのまま銅貨何枚と言っていたからよく分からなかったがもしかしたらないかもしれない。

幸いなことにお金の価値としては定番の銀・銅でパン一切れが銅貨1枚。

銀貨1枚は銅貨100枚に相当。

恐らく銅貨1枚は現代で約100円くらいであろう。

すると銀貨は約1万円。

周りの話を聞いてると金貨もあるらしい。

わりとわかりやすい価値観で助かった。

物価も特に変わりはなかった。

ただ武器や防具も売っていたがピンからキリまであってそこから辺の判断はつかなかった。

ちなみにこの世界魔法があるらしい。

魔導書や杖、マジックアイテムなど普通に売っててまさにファンタジーだった。

魔法の大きな定義はないが詠唱等で奇跡を起こすのが魔法。

個人の特別な力は異能と称されていることも分かった。

宗教もあるらしいがそこまで強いものではなく、せいぜいよくある職業僧侶といった人がいるくらいらしい。

「よかったな。」

中世まっさかりの宗教じゃなくて」

「どうして？」

「魔女狩りや異端者狩りなんてあつたら即討伐対象だぜ。」

黒猫なんてまさに魔女の使い魔だよな」

「確かに・・・」

そんなことを話しながら市場の人に聞いた大きめの道具屋へと向かった。

「ここか、割と普通な感じかな？」

「私はなんかディニーのトゥーンワールドにきたみたいでドキドキするけど」

「俺には」の世界がすでに「トウーン」過ぎるけどね」

「きっとそのうちスプラッタトウーンになるのよ」

「サイレンに出てくる血塗れのつなぎとか」

「やめてよ、夢に出てきそうじゃない」

「現実に出てきてもおかしくない世界に俺たちはいるんだけどな」

「そうでした・・・」

うなだれた美津を頭にのせながら俺は道具屋のドアを開いた。

「こんにちは」

中は現代で言うならば土産物屋のような感じであった。

商品棚にそれぞれ系統立って商品を置いてある感じで良く整理してある店だった。

「はいはい、いらっしやい。」

お嬢ちゃん、どんなご用で?」

この店の主人らしき中年の男がカウンターでパイプをすいながら本を読んでいる。

「道具というか珍品？を売りに来たんですけどいくらになりますか？」

そういつて俺はカウンターに手持ちの小銭の半分と千円札を一枚だした。

「どれどれ、ほう、これは確かに珍品だね」

見慣れない品に興味を示したのか小銭や札を手にとって真剣に観察している。

様子を見ているとお札にかかれた絵の精巧さに驚いたらしい。

平静を装いながらどうやって手に入れたかを聞いてきた。

そこは無難に昔あった旅人から記念にもらったと返したが。

十分観察し終えたのか硬貨をおいて主人はこっちを向いた。

「ふむ、確かに見たことない珍品だがこういったものは良くあるものでね。」

価値はそこまで高くないんだ。

そつだな、全部で銀貨1枚と言ったところかな」

銀貨1枚、元を考えれば結構な換金だが俺たちの財産を考えると少なすぎる。

なにより、先ほどの驚愕の顔からして絶対ぼった食ってる。

だよね〜。

絶対小娘だからだませるとか思ってるんだよ〜。

美津も主人に聞こえないくらいの声で話してくる。

「そつですか、それじゃ残念ですけどお話はなかったと言つことばで」

そついうと主人はまくし立てるようににいつてきた。

「どつ、どつしてだい？」

正直言つて二束三文なものを銀貨1枚もだすんだよ。

正直に言つて君にかなり得があると思つけど。

銀貨1枚と言ったら結構なお小遣いになるだろう」

かなりおいしい話が流れそうになり主人も焦っているらしい。

「それくらいじゃ安い宿に泊まっても2、3泊しか泊まれませんしね。」

路銀が足りなくなつたので仕方ないと思いましたが、それは元はといえば知り合いからもらつた大切なものですし。

ですからそれくらいしかならないんだつたら持つていた方がいいですし」

そついいながらお金をしまつて出て行こうとすると主人が慌てて行つてきた。

「そつ、そつだ！」

2倍だそつ。

いや、君の大切なものなんだろう。

3倍だしても惜しくないぞ！」

よつほど価値があると踏んでいたのかいきなりつり上げてきたけど、

この様子ならもつとあげれそうである。

ふむふむ、ならば・・・コニコニコ。

なるほど、その案いただきだね。

美津と話していたのが分からないように装いながら俺は言った。

「実は前に旅の途中にあつた美術商にあつたときは先ほどのコインと絵で金貨2枚は惜しくないと言って頂いたんですよ。」

その時はまだ路銀に困ってませんでしたしお断りしたんですけど。

それでここに来た途中にその人の馬車を見つけまして。

きっとその人のほうが高く買ってくれそうなんでソツチで売ることになりますね」

すると主人は悩み出してしまった。

時折「金貨2枚・・・しかし、「でもそれくらいは価値が・・・」と聞こえてくる。

この調子なら金貨2枚相当で買ってくれるだろう。

とんだ良い買い物したもんだ。

美津が頭の上で笑顔が黒いとか言っているが無視だ。

これは生きるためにしょうがないのだよ。

第一最初にぼった食ってきたのはあちらなんだから俺に罪はない。

結局観念した主人が金貨2枚と銀貨50枚で買ってくれた。

一気に大荷物になってしまったが美津の能力で重量を軽減しているから問題なしだ。

乞食から一気に成金になってしまった。

さて、何を食べようか。

二人してにやつきながら歩いていたら微妙な顔をして避けられてしまった。

若干傷ついた。

待たせたな！真打ち登場！！

成金になった俺たちは早速服屋へと向かい冒険家風の服を購入した。

着てた服も銀貨30枚くらいで売れたのでむしろ利益が出ている。

なんとも幸先がよい

美津も服を着たいようだったが流石に猫用は売っていなかったの
着ることはかなわなかった。

オーダーメイド？

そんな金などない！

服を着替えていざ飯屋へ。

服屋で教えてもらったおいしい定食屋でオススメを注文し、ギルド
について話を聞く。

ご飯のことで頭がいっぱいで気づかなかつたがどうやらこの定食屋
の正面にある大きめの建物がギルドらしい。

ついでにギルドは銀行的なことも兼業しておりギルドで渡されたマ
ジックアイテムが銀行カード的な役割を果たしてくれるらしい。

どうやってあんなかさばる硬貨で取引しているのだろうと思っ
たらそのようなからくりがあったようだ。

なんともご都合主義なことだ。

ちなみに美津は出された猫まんまもどきに夢中で話を聞いてい
なかったため俺が後で説明することになった。

お腹いっぱいになった腹をさすりながら向かいのギルドへ向かう
ことにした。

実際に目の前に立つと予想外に大きい建物だった。

「どっかでこんなを見たことあるような……」

「そうだ！フェーリーテイルっ！！」

「まあ、確かにあれもギルドだわな」

そんな馬鹿なことをいいながら中に入るとギルドだけあって筋肉質
なおっさんやお兄さん、それにお姉さんにおばさんがたくさんいた。

ほとんどが酒を呑んでいたり掲示板で依頼を探していたりとまさに
漫画にあるギルドそのもの。

制服っぽい統一された服の人もいるが恐らくギルドの職員だろう。

俺の感想としてはフェリーテイルとンハンがごっちゃになった感じだ。

二人してきよろきよろとカウンターへ向かうといかにもチンピラ風な男二人組が声をかけてきた。

手にジョッキを持ち、顔を真っ赤にし、喋る言葉はろれつが回っていない。

どうみても酔っぱらいです。ありがとうございます。

美津が頭の上で小さくつぶやいた。

「よおおっ、おじょうちゃんっ!!」

なんだい、いらいかあいつ!!」

「そんなことより、がんばるおれたちにおしゃくしてくれよおお!

いまだったらいいことおしえてやるぜええ〜」

「おいおい、おまえロリコンか〜」

「あっはっはっは、おんななんてだいぢまえばみんないっしょよおお」

「ちげーねー、ぎゃははははは」

うわゝ、すげゝDQNな二人組。

というか今気づいたが普通に日本の言い回しとか使ってるな。

さっきの道具屋も二束三文とか使ってたし。

それらしい言葉が脳内変換されてるのか？

うわゝ、女の敵だね。

やっっちゃおうよ悠。

頭の上で剣呑な気配が伝わってくる。

どうやら美津は目の前の頭の弱そうな二人組がいやらしい。

まあ確かにこの様子じゃ普通に生理的嫌悪を抱きそうだが。

周りの人もこちらに注目しているが助けしてくれる様子はない。

きっと酒の肴程度にしか思ってないのだろう。

というかギルド職員さえも来ないのはどういふことだろうか。

依頼をしに一般人もくるはずなのに毎度このように絡まれてたら問

題だろ。

それとも依頼は別の営業所みたいなどころでも出来るようになって
いるのだろうか。

さっさとなぎ倒して登録したいが、なんの口実もなくなぎ倒してし
まっては後々めんどくさいことになりかねない。

とくにことば、

「すみません。

私は冒険者登録をしにきたので通してもらえませんか？」

とりあえず正攻法。

「ほづけんしゃとじろくろう〜。

おじょーちゃんか〜〜。

きちははは、ちめとけちめとけ、おじょーちゃんじゃすく〜しんじ
ゃしげ…。」

「いやいや、きつとからだをつかっておしごとするんだらうつよ。

たたかうのはもりのなかじゃなくてべっどのうえとかなんっ！

ギャハハハハハ

あっ、向こうにいる女冒険家っぽい人の額に青筋ができてる。

まあ、自分に言われてないとはいえ同じ女としてむかつくんだろうな。

俺が冒険者相応の実力を持ってると持っていないをおいといて。

頭の上の相方も暴発しそうなのでさっさと進めることにする。

「それじゃあ、失礼しますね」

そういつて横を通ろうとすると腕を捕まれた。

せっかくおろしたての服が汚い手で触られてリアルに汚れてしまった。

どうしてくれんだっ！

「おいおい、なにかってにいつちゃってるの？」

「よわいおじょうちゃんはこれからおれたちとズッコッコのついでにぼうけんしゃになれるかしけんするんだろ？」

にたにたと嫌な顔で話しかけてきたので顔を嫌悪に歪めながら言い返す。

「結構です。」

少なくとも貴方たちよりよっぽど強いと自負してますから」

そついいながら捕まれた手を振り払う。

「あぁっ、このガキ、優しくしてやればつけあがりやがって！」

「身の程をわきまえろよ、ガキが！！」

いつ優しくしたんだか。

そうあきれながらポケットに手を入れ、入っていた何かを握る。

逆上したチンピラの一人が手を振り上げたところで周りの人が慌てて止めに入ろうとするが距離的に間に合わない。

誰もが殴られて倒れるであろう少女を想像したとき、

「ぐぐばげろぁっ!?!?」

鋭い音と腕を振り上げていたチンピラの悲鳴と共にチンピラの一人が吹き飛んで誰もいなかったテーブルを巻き込み盛大に滑った。

呆然とする周りの人とチンピラ。

何が起こったのかを正常に把握しているのは俺とあまり驚いていない一部のいかにも強そうオーラを出している一部の人のみ。

「なっ、なにしゃがったっ！」

その言葉はこの周りにいる人の声を代弁していると言ってもいいだろう。

何せ小さくて細い少女がチンピラに殴り飛ばされると思ったら、飛ばされたのは殴ろうとしたチンピラで、そのチンピラはよほどのダメーじだったのか今もぴくぴくしている。

それに少女が特に動いたというわけでもないのにひとりでチンピラが1人で飛んでいったのだ。

この少女の様子から少女が何かしたのは明白だが何をしたまでは全然分からなかったのだ。

そんなんだから残ったチンピラも冒険者としての理性が一片でも働いたのか、うかつに動くことが出来ずに怒鳴ることしかできなかったのである。

さて、そんなことをした悠達であったが、

ふっ、森で遭遇した熊さんと比べたら・・・。

無機物さえあれば私だってチートなんだよっ！

どうやらこの街にくるまでの試練ですでにそれなりの肝っ玉を身につけていたらしい。

ちなみに悠達がしたことはメーカーの起動ではない。

これからお金を稼ぐためにギルドに所属するに当たってやはり腕っ節が必要なのは明らかである。

そしてさすがに街の中で極太ビームが飛び出すかもしれない運試しをする気はもちろん彼等になかった。

そこで考えたのが美津の無機物操作である。

硬貨を手に入れた美津の能力をいかにも悠が使ってるように見せているのである。

チンピラを飛ばしたのは悠がコインをはじき飛ばしてそれを美津が急加速させてぶつけたのである。

まさに名前はと（サ）ある（イ）異界の（ク）念動砲。

ちなみにこれを林の中で悠の元の世界の硬貨で初めて全力で試したときはそれこそレールガン並の威力を出して木々をなぎ倒していた

のだが。

さて、話を戻して悠はびびりながら怒鳴るチンピラに向かってふつと笑いながらポケットからコインを出して上へはじいて見せた。

「はあっ、まさかそのコインをはじいたとか言つつもりか？」

「どうおもいますか？」

とりあえずその身で試してみます?。」

そついいながらコインを手にセットしてチンピラに向ける。

逃げてもよし、来てもよし。

チンピラは後者を選んだようだ。

「なめやがってえええっ!!！」

顔を先ほどより赤くしたチンピラがこっちへ来るがチンピラが開けてしまった間合いのおかげで十分狙いを付ける余裕はある。

「一言言っておきます」

そついいながらコインを上へはじいた。

コインが放物線を描きながら悠の手の握り拳の前に落ちていき、そこでコインに急激なベクトルが加えられ、飛ばされたコインは見事にチンピラの安そつな鎧を大きくへこまししながらチンピラを吹き飛ばした。

チンピラは起き上がってこず、静かな時がその場を支配した。

「えつちいのは嫌いです」

T LOVEるかいつ!!

頭上の美津が突っ込んだ。

悠が一言発したことで緊張が解けて周りがまた騒ぎ出した。

やれどうやってあそこまで早く撃てるのかや、あれは魔法か、あの硬貨をよけるか、むしろ撃たれたいやら。

というか最後のはかかわりたくないな。

同感。

2人で若干黄昏れていると声をかけられた。

「派手なパフォーマンスだったわネン」

一度聞くと当分忘れられそうにもない特徴的なおネエ言葉・・・、

「ひさしぶりにあそこがキュンってきちゃったワン」

腰を振り、腰布をなびかせながら歩いてきたのは・・・、

「助けようとも思ったんだけどドンッ」

ツインテールの・・・、

「ただの依頼者ならともかく冒険者になりたいって言うんだもノン。

女である以上ああいったことは軽く対処出来るくらいの実力がなきゃいけないかったからテストしてみたノ」

上半身裸の筋骨隆々のフラダンサーなおっさんだった。

「改めて自己紹介するワン。

私がこの街『ルーフェス』のギルドの統括、シエリアスⅡハイラン

ドボン。

シェリー姉さんでもシェリーお姉様とでもなんとでも読んでくれて
いいわヨ」

いきなりお姉さん宣言するおっさんを見て俺は思った。

そういえばこの街の名前ってルーフェスって言うんだ。

再確認完了、やっぱり男は泣きでしょ

「あらん、そんなに見つめちゃって〜。

照れるわん。

でもごめんねえ〜、私もう彼氏がイルのよあ〜」

この人にはどれだけの悪夢が詰まっているのだろうか。

目の前にいる悪夢は俺たちなど気にしていないようにずっと腰を振りながら喋っている。

助けてくれる人がいないか周りを見ってみるがみんな目をそらしてくれた。

どうやら他の人も関わるのはご遠慮したいようだ。

「あの、失礼ですがお知り合いに貴方のような方で生クリームやお刺身で女体盛りならぬ男体盛りをする方っていたりしますか？」

「あら〜ん、そんな人はいないけど私的にとてもすてきそうな人だわん。

是非ともお会いして色々とお話ししてみたいワ〜」

本気でやめてくれ。

周りで聞き耳を立てていた人は想像してしまったのか顔色が悪いようだ。

青い顔をしてこっちをにらんでいる。

正直スマン。

「えっ、えっと、それでギルドの統括の方がなんの用でしょうか」

「あら〜ン、そうだったわね。

強いて言えば貴方にキヨ・ウ・ミンがでちゃったからラン」

キラーンツとシェリアスの目が光った。

ゾクゾクゾクウウツツ!!!

なっ、なんだ今の背筋が凍えるような感覚はっ!

「だから奥でお話ししまシヨ。

あっ、大丈夫よ。

ちゃんとそこで冒険者の登録も済ましてあげるから」

そういつてシエリアスは俺の首筋を引っ？んでへ部屋へと歩き出した。

どことなく周りからドナドナの歌が聞こえてきた。

どうやら冒険者の1人が歌っているらしい。

つられて他の冒険者が一緒に歌い始めたりすすり泣き出すものもいた。

「って、ちょっとストップストップッ！」

他の人も歌ってないで普通に助けてよ！

えっ、無理？

ですよね〜、じゃなくてっ！

シエリアスさんも何普通に部屋に行くことしてるんですか！

まだなるって言ってませんよっ！」

「いいじゃな〜イ

貴方と私の仲なんだし。

あと言ったじゃない、私のことはシェリーお姉様って言って

「誰が言うかあああ~~~~~っ!!」

第一貴方の見た目からして大好きなのは男の子でしょうっ!

私は非常に不服ですが女です!」

「いいじゃない、いわゆるお持ち帰りいいーっ!!っつてやつよっ
」!

「いやあああああー!ー!ー!っ!!!ー!ー!」

ひたすら逃げだそうとあたりを見渡すといつの間にかに降りたのか
美津が引きずられる俺の後ろをついてきていた。

(助けてっ!)

(無理!)

猫顔のくせにやけにさやかなな笑顔で返された。

(なっ、なんで!?)

(私、決めたの。

あの類のおっさんには金輪際関わらないって)

(裏切り者~~~~)

アイコンタクトで話しているうちに無情にもドアは閉められた。

「あら、花びらが」

ギルドカウンターに生けられた花の花びらがそつと散った。

残された冒険者達は連れて行かれた少女のこれからの未を思いそつと涙を流した。

「なんてことあるかあああ~~~~~!!!」

とりあえず中で年齢制限に触れるようなことはなく、気持ち悪い視界と声さえ我慢すれば普通に会談は終わった。

したことと言えばギルドの規定や注意の説明や登録に関する質疑応答など、その程度だ。

やったことはたいしたこともないのに酷く精神が疲れてしまった。

部屋から出てくるとホールにいる冒険者達がワツと騒ぎ寄ってきて背中を叩かれたり激励されたりした。

へろへろになってカウンターで飲み物を頼む。

カウンターのダンディなマスターが「・・・奢りだ」といってそつとホットミルクを出してくれた。

うん、年齢の高い男の人はこう渋くてダンディな人が理想だよな。

悠、思考が混乱してるよ。

床で小皿にミルクをもらった美津が呆れながら喋る。

しょうがないじゃないか。

あんな見た目公害な人と1時間くらい面談をしていたのだから。

本当に別の意味で神経のすり切れる面談だった。

この後さっそく仕事をしてみようと思っていたがこの調子では無理だろう。

幸いお金はあるので今日は拠点となる宿屋を探すことにする。

一息ついてからマスターに良い宿屋がないか聞こうとするとマスターが黙ってずっとメモを渡してくれた。

「えっと、これは？」

どうやらメモは簡単な地図でどこかへの行き先がかいてある。

「そこは冒険者初心者向けで値段や設備が良心的なところだ。

冒険者になったばかりお嬢ちゃんにはちょうどいいだろう。

ペットもOKだしな」

そういつてグラスを拭くために離れていった。

「さびい、渋すぎる・・・」

「いや、悠。

貴方一応元男でしょ」

元男だからこそ憧れるんじゃないか。

何あの渋さ。

かっこよすぎるんですけど。

また明日ここに来ようと心に留め、紹介してもらった宿へと向かった。

ちなみに、値段の割にかなり良心的な宿だった上にマスターの紹介だと言ったらさらに割り引いてくれた。

やっぱり将来はああいう人になりたいなと思う一日だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2285/>

想像と現実は別物

2010年10月31日07時05分発行